

B 47 衣料による皮膚障害の最近の動向とユーザーの衣生活態度にみられる問題
(第2報) 着衣のしかたに注目して
大阪教育大 ○奥窪朝子 山口大医・公衛 酒井恒美

目的 前報(1977年の調査)において衣料による皮膚障害(SLC)は、衣料処理剤の有害性にかかわる法的規制の実施によって重症障害は激減したが、軽い障害の訴えは1971年(法規制実施前)に比し、むしろ増加しているという実態を明らかにした。その防止対策に資することを目的として本報は、その後のSLCの推移を検討するとともに、衣服衛生にかかわるユーザーの生活態度との関連から追究を試みた。

方法 近畿地方に居住する成人男女(18~69歳)を対象にアンケートを行い(1981年1月)、有効回答2014のデータを解析に供した。多変量解析には数量化理論を適用した。

結果 1) SLCの経験を訴えた者は821名41%で、女(48%)は男(33%)よりも高率であった。その経験率の推移を30~59歳の女性についてみると、1981年での45%は1977年(62%)よりも低下を示したが、1971年に比し重症障害が減少しているとはいえ依然として同程度であった。原因と考えられる衣料は、セーターが41%で圧倒的に多く、また韓国、東南アジアなどの製品が全体の11%に及んだ。2) セーターによる皮膚のかゆみ・ちくちくの経験が1656名82%にみられ、このうち883名はSLCの経験がないと答えた者であった。一方、セーターを直接素はだに着る者の率は35%で、20歳代では52%にも達した。これらの人では97%に障害の訴えが認められた。3) 素はだにセーターを着る者と着ない者のプロフィールを解析した結果、前者は弱年層に多く、肌着に求める条件として吸湿性はどうでもよく、綿製品志向でなく、SLCに対して正しい認識を持たないことがわかった。後者は40~60歳代に多く、他の寄与要因におけるプロフィールは前者と対照的であった。